

石上乙麻呂配土左國之侍歌三首并短歌

石上乙麻呂配土左國之侍歌三首并短歌
石上乙麻呂乃尊者弱女乃我余妹而馬自物塊取附肉目
物弓矢圍而王命恐天離我部余退古衣又打山
從還來奴香聞

王命恐見刺並之國余お座耶吾背乃公美

繫卷蒙湯石心石住吉乃焦人神船舳余牛吐賜

付賜特嶋之嶋前依賜將磯乃嶋前焦浪風余不合

逸草首見身疾不有急令愛賜根本國部余

父公余各者真名子叙此乃自余各者愛呢叙本舞

八十氏人乃手向為等恐乃坂余辭奉吾者叙追遠

杆土左道兼

反歌一首

大崎乃神之小濱者雖小百船能毛過迹云莫國

(西本願寺本 万葉集)

石上乙麻呂卿土左に配さるる時の
歌三首并せて短歌

A 石上 ふるの尊は たわやめの 惑ひ
によりて 馬じもの 繩とりつけ し
しじもの 弓矢かくみて 王の 命恐
み 天離る 夷部に退る 古衣
又打山より 帰りこぬかも(6・10一
九)

B 王の 命恐み 刺し並ぶ 国に出でま
す 〇〇(注) 我が背の君を かけま
くも ゆゆしかしこし 住吉の 現人
神 うしはきたまひ つきたまはむ
島の埼々 よりたまはむ 磯の埼々
荒き浪 風にあはせず つつみなく
病ひあらせず すむやけく 帰したま
はね もとの国辺に(6・10二〇、一
〇二一)(注)

C 父君に 我は愛子ぞ 母刀自に 我は
愛子ぞ 参昇る 八十氏人の 手向け
する 恐の坂に 幣奉り 我はぞ追へ
る 遠き土左道を(6・10二二)

反歌一首

D 大崎の 神の小浜は せばけども
百舟人も 過ぐといはななくに(6・10
二二三)

石上乙麻呂卿、土左に配流される
時の歌三首并せて短歌

A 石上 ふるの尊は、たおやかな女の誘
惑によって、馬のように繩をかけられ
鹿や猪のように弓矢で囲まれて、天皇
の命令におそれかしこまって、都から
離れた田舎(土左)へと下る。(古衣)
まつち山から帰ってこないかなあ

B 天皇の命令におそれかしこまって、並
んだ国へ向かう私の夫を言うもはばか
られる住吉の現人神が海路を支配さ
れ、お着きになる島の埼という埼、お寄
りになる磯の埼という埼で荒い波や風
に見舞われることなく、無事で病気も
なく、すみやかに帰してください、もと
の大和国へ

C 父に私は愛されている、母に私は愛さ
れている、地方から上京してくるたく
さんの人々が旅の安全を願い、幣を手
向ける恐の坂を、幣を奉り私は遠い土
左への道に向かう

反歌一首

D 大崎の神の小浜はせまいけれども、多
くの舟人たちも過ぎていったりはしな
いの

この歌群（A～D）は石上乙麻呂が土左に配流される時のものである。実際の事件を題材にしたものであり、多くの疑問や問題を抱えている。卒業論文では当該歌群が宴席歌であることを論じるとともに歌の表現性にも説き及んだ。

A（第一長歌）

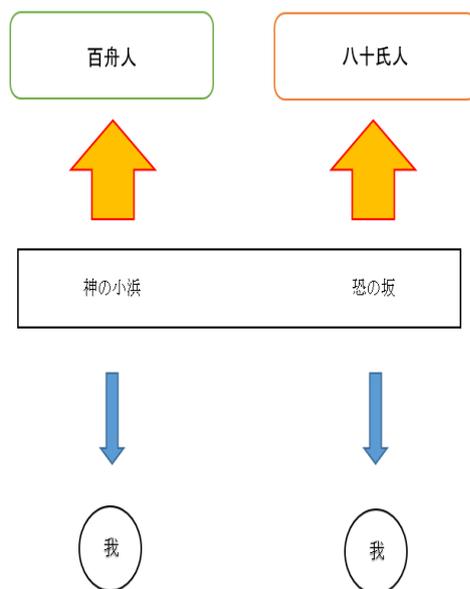
「石上 ふる」という表現は、下に山や田などの言葉が続くことが多く、基本的に地名を表わす。しかしここでは、「尊」と尊称を従えることによって、暗に乙麻呂を類推できるような表現になっている。あえて、実名を出さず類推させる点に作者の皮肉が透けて見えるだろう。また、人物名の歌い起こしを持つ歌が宴席歌に見えることから、Aは宴会の場で歌われたものだろうと想定した。

B（第二長歌）

「我が背の君を」という表現は、一般に妻から夫に対しての呼称である。しかし、万葉集中の歌では親しい男性同士で使われることもある。歌全体の形式の似ている歌が憶良にあり、その歌は憶良が遣唐使の友人に旅の安全を願い贈ったものである。さらに作者についても乙麻呂の妻が配流事件において、この歌を詠める心理状態にあったとは考えにくいことから、第三者の作と考えられる。歌の表現から乙麻呂に同情的な思いが背景にあったと推測した。

C D（第三長反歌）

「父君に 我は愛子ぞ」という表現は万葉集の中でも珍しい表現である。しかし、配流時点で乙麻呂の両親は亡くなっていると推測される点、自らを哀れに感じさせる表現を乙麻呂自身が詠むのかという点から、第三者が詠んだ可能性が極めて高い。また歌の構造に着目すると、下図の通り二首を通して衆と個との対立性を看取することができる。Cは「坂」、Dは「小浜」を境界として、「八十氏人」や「百舟人」という多くの人々とは対照的な「我」を描いている。第三者の詠ではあるが、衆の中でただひとり流されていく乙麻呂の個としての悲しみが描かれているといつてよいだろう。



結論

これまでの先行研究では、関係歌群を一つの流れとして見ようとしてきた。しかし、流れとして捉えるには矛盾点が多すぎ、あちらこちらの宴席で歌われたものが寄せ集められている可能性が高いと考えた。題詞に作者などが記されない点もこのことと関係するだろう。

（注一）古くは「くににいますやわがせのきみを国尔出座耶吾背乃君矣」と訓み、独立した短歌と考えられていた。旧『国歌大観』も一〇二〇、一〇二一とそれぞれに歌番号をふった。しかし、宣長の「耶」の字の上に「愛」の字が抜けたとする説から、一つの歌とし、「はしきやし」と読むことが通説となっている。ここでは誤字説に従うこともできないため、「〇〇」と記した。

（注二）この箇所の歌番号については、旧『国歌大観』に従った。